

宵衣肝食（＝宵肝）について

—「肝」の意味するものは？—

中醫クリニック・コタカ 小高修司

『素問』六節藏象論篇第九に「肝は罷極の本、魂の居るところなり」とあり、肝は精神活動力の源泉とされている。熟語においても肝を含む語に「まごころ、こころ」の意味を持つものが多い。以下に白川静『字通』などを参照し列記する。

肝懷（「その人を存想するに、肝懷に痛切なり。奈何、奈何。」）

肝血（「肝血の誠、終に一聞だにもせず」）

肝肺（「^{うしな}闕う恋は肝肺を勞す」）

肝心（「^{せんぼう}瞻望 未だ達せず、肝心分裂す」） *仰ぎ視ることを「瞻」と曰う。

肝胆（「^{わす}其の肝胆を忘れ、其の耳目を遺れ、芒然として塵垢の外に彷徨し、無事の業に逍遙す」）

肝腸（「詩 此を念うて次第を失い 肝腸日々に憂いに煮らる」）

肝脾（「^{はる}還顧するに遽かにして冥冥 肝脾為に爛腐す」）

その他にも「肝膈」「肝腦」も「こころ」の意味を有する。ちなみに大切・重要を意味する「かんじん」は「肝腎」と書かねばならない。

さて表題の「宵衣肝食」「宵肝」とは如何なる意味なのか。『諸橋大漢和』などによれば、「夜の（明けきらぬ）うちに起きて衣裳を着、日が没して後に食事をとる」ということで、つまりは天子が政務に勤勉なことを意味する。

「宵」は「宵闇迫れば」とか「宵の口」などのフレーズの印象が強く、何となく夜の始め、つまり黄昏時をイメージしてしまうが、実際の意味は、夜（『尚書注疏』卷一「宵、夜也」、あるいは「定昏」（『周禮注疏』卷三十六「宵、定昏也」：定昏とは天が將に黒き時を云う）であり、『周禮注疏刪翼』卷二十五（明・王志長撰）に「王氏曰く始夜自り半に至るを宵と曰う」、さらに『欽定周官義疏』卷三十七には「先明之を晨と謂い、中夜之を宵と謂い、通夕之を夜と謂う」とより詳細な定義がある。

一方「宵衣肝食」の意味からして、いかにも「肝」に夜遅いというような意味があるように思われるのだが、『康熙字典』や『諸橋大漢和』の引用文献にも見られない。しかし『釋文須知卷』卷三に「肝は日ノ夕ケタルコトナリ」とあり、用例として『漢書』の「天子^{ひくれ}肝て食を忘れる」があげられている。

ついでに謂うと、『操觚字訣補遺』卷三によると、肝には「^{おか}ヲカス」の意味があるようで、「邪氣 其の肝を肝す」（策三）とある。

ともかく古典における実際使用例を見てみよう。『格物通』（明・湛若水撰）卷十一に、唐の憲宗、元和七年春三月丙戌、上御延英殿の李吉甫言「天下已に太平、陛下宜しく樂に為すべし」。李絳曰く「漢文帝の時、…^{たの}之に加えて水旱の時、倉廩を空虛と作すは、此れ正に陛下 宵衣肝食の時、豈し^{すみ}み得て之を謂うは太平を遽やかに樂と為す」

と。

また『鴻慶居士集』（宋・孫覲撰）卷九「謝賜對衣金帶表」には、以下の用例が見られる。

上聖 寘肝焦勞の日

さらに『欽定南巡盛典』卷三十五にも、

朕が寘肝憂勤の時

と見られる。為政者の精勤が望まれるところである。